

わたぼうし新聞 第3号

発行者 羽咋市中央町フ169-2

羽咋公民館内

わたぼうし友の会

発行日 昭和60年(1985年)5月15日

第3号の特集 ボランティアとは

一番初めに「愛」があったんだろう
その「愛」が太古の昔から
いつも昼と夜をくりかえし
気の遠くなるほどくりかえし
私がここにいるんだろう
悲しみだってあったら
いさかいの時は血が流れ
いくたび悲しみが過ぎたら
出逢いと別れ
天と地の間には
嵐もあったにちがない
それでも「愛」はつづいている
それでも私がここにいる
ーおぞね としこー

本の紹介 福井 達雨氏一連のもの

福井先生は、滋賀県にある重い知恵遅れの子供たちの施設止揚（しょう）学園のリーダー（止揚学園では園長とて呼ばない）です。

重い知恵遅れの子供たちの教育を通して、福祉とは何か？そして、目に見えるものより目に見えないものの大切さを述べてあります。周囲から「バカ」と言われている子供たちの教育の可能性を、保母や研修生と激しくぶつかりながら説いてゆきます。また、ボランティア活動への参考書としても最適な本ばかりです。

「ぼくアホじゃない人間だ」

「ぼくら太陽があたらへん」

「生命をかつぐって重いなあ」

「僕たち心で勝つんや」 など

福井 達雨著

柏樹社 ¥1,500

特集！！ボランティアとは？

辞書では――志願兵・義勇兵・自ら進んで提供する。 自発的に申し出る
定義では――自発性に富んだ人が無償で社会の利益のためにつくすこと。（自発性・公共性・無償性）

どのようにして――すべての問題を私たちの問題とし、時には社会の補完的な役割を。
時には創造的、先駆的な働きをし、社会全体の質を高める役割をする。（日本奉仕協会パンフレットより）

高島巖氏は――もてるものが もたないものにはではない
しあわせなものが ふしあわせなものにはではない
もてるものも もたないものも
しあわせなものも ふしあわせなものも
ともにあり ともにとりくみ
ともにいきることなんだ

福井達雨氏は――社会福祉の現場のみで生きるものではなく、生活の中に、自分の心の中に生き、それを地盤として外に働きかけられていくものである。真のボランティア活動は個の倫理、連帯感から生まれる。「ため」にはなく「共」に……。この心が真のボランティアを育てていく。

一般の人たちはボランティアをどう見ているか？

（グラスルーツ・ボランティアのここがきらいだ！より）

自分の悩みに背を向けてきょうも元気に善意の押し売り。

人のため！そこのけ そこのけ善意が通る。

マスコミにダメにされる。決まって

クサイ。クサイ。視野がせまい。クライ。無神経に傷つけてる。

自己犠牲では長続しない。

グローバルな発想ができないのはなぜ？知性的にものを考えていない。

定義があっても、よくわからないのがボランティアではないでしょうか？今の時代は言葉のイメージが一人でに定着先行し、そこからあらたな誤解が生じていることがあります。言葉の意味そのものよりも、その心を一人一人自分自身の問題として常に考えあわせていくことが、今必要なのではないのでしょうか？皆様のご意見をお待ちしています。

詩 施設入所者

風かおる
あねさんかぶりの早乙女の
今昔すがたの田植えかな
野々市の
大地にはえる花の群
色色色とつづくかな

地域の学校 保育所へ 団体職員

僕の勤めるひまわり教室（重度心身障害児通園施設）からは、今年も約10名の子供たちが地域の保育所（園）や学校（養護学校ではなく、校区の学校）に入っていました。また、ひまわり教室では、障害児と健常児のふれあいを求めて地域の保育所（園）と交流保育を行っています。

心身のハンディによって子どもたちの学ぶ場を、行政側の都合や専門家と言われる人たちの思惑によって勝手にふりわけるのはおかしい。子どもは、子ども同士の中でお互いに刺激しあいながら伸びてゆくもの（共有）。という考えをもとにひまわり教室では実践を重ねています。その結果、「わたぼうし新聞」第2号でKさんのような、「盲・ろう・擁護の共通の哀しみは家に帰ると、その地域の学校の友たちがおらず、地域への解けこみを一層困難にしている。」などといったようなケースは、ひまわり教室に関する限りは少ないと言えると思います。保育所（園）や学校の同じクラスの子と道で会うと声かけしてくれる、家に遊びに来てくれるといった実践例をたくさん持っています。

目の不自由な子ども、耳の不自由な子ども、体の不自由な子ども、知恵おくれの子ども等。彼等の教育は特別な建物を設け、健常児と切り離さないといけないことなのでしょうか？いわゆる専門教育といわれるものは、そういう所でないとやれないのでしょうか？そのことのマイナス面（例えばKさんが指摘している点）はどうするのでしょうか？障害児集団の中だけで育ち、専門教育を受けた彼等の多くが不適合をおこしてしまっている事実。特別な中で育った彼等は所詮温室の中の花で、実社会に出ても特別な庇護者がいないとやっていけないようになってしまったのです。

僕は「専門教育」を完全に否定しません。その有意性は大いに認めます。しかし、健常児（及び社会）と切り離されたところで、それがやられているところに疑問を抱くのです。今の社会全体がそうですが、社会弱者である障害児（者）や老人を施設という、あるいはそれに準じた特別な空間を設けて隔離をしている（隔離していこうとしている）ことに強い憤りを覚えるのです。そうして成り立った社会では「効率」と「便利さ」が徹底的に追及され、「人間性」といった「心の側面」がどんどん片すみにおいやられてやせ細り、なにかうそ寒い血の通わない社会となっているのではないのでしょうか？

障害児（者）と健常児（者）の交流などを言う時、今の社会の有り様全体を考えると同時に、僕たち自身の中に抜きさしならない考えとして巣くっている能力主義信仰。及び人を外見だけで判断し、レッテルをはっていきような考え方等々を見つめ直して、自分自身を問うていく作業がないといけないのではないかと思います。

ボランティアについて 地域住民・障害者

ボランティアと聞けば、あらためて大きな福祉活動を思われる方も多いと思います。元に重度障害者を初め、老人のお風呂をつかわせている姿をテレビで見せられて感動することもあるのですから当然でしょうが、こうした目立つことばかりでなく、こんなことも言えるのではないのでしょうか？

それは、「いつからともなく、大きな悩みを抱えてどうしたらいいのか、どうすべきなのか」とわからなくなって、一人で苦しんでいる時に声をかけてくれる友が、自分にとって話せる心を開いて打ち明けられる友にめぐりあえた時に、真のボランティアが生まれるのではないかと。

幸いにして話せる友がいる私は、電話での会話を第一にして、年間何度となく顔を合わせて楽しむ時など、友が黙って聞いてくれながらも、「ほら、そこを割り切らなきゃダメよ！…… だからね……」とアドバイスが出てくる。それによって、気が楽になって心がスーとしたように。いえ、例えアドバイスがなくても、聞いてもらえたというだけで同じ気分になるものです。また、それが手紙であれば読み返す度に、深く感じることもあって気がついて教えられたこともありました。こうして思えば、私にとってボランティアとは語り合える友だと思います。

団体紹介コーナ 劇団アカシア

演劇を通して、健常者、障害者が手を取りあい、活動の中から社会参加を行っていくことを目的に昭和58年10月に設立。

現在までに医王病院内で4回公演。昨年7月14日に金沢市十一屋町のひまわり教室で街に出ての初公演を行いました。今年7月30日に「医療問題」－患者の人権と医の倫理をテーマに、患者、医者のかかわりからおこっている倫理問題について金大医療技術短大の先生のアドバイスを受けながら、2回目の地域公演の準備中です。現在の悩みは男子メンバーの不足です。演劇に限らずいろんな人たちとの交わりを、目指していますので、どなたでも連絡をして欲しいとのことです。

「わたぼうし新聞」を読んで 主婦

障害児と健常児の交流の場が数多く重ねられ、又その様子がテレビを通じて広く知らされて共に生きる社会をめざして、みんなで考え行動することになってきたことは、一昔前と比べずいぶん進んできたように思います。今から27年前、県下に初めて肢体不自由児教育が行われたころは、連日婦人団体の見学が学園「平和町の石川整肢学園」を訪れて、ついに子供たちは「僕ら動物園のおさるでない」と怒りだすしまつでした。そんな時、私はいつもこうだったのです。「残念ながら今は、人々はあなた方のことを知らないのです。じろじろと見られて不快なことでしょうが、そこで扉をしめてしまったり、ふくれっ面をしたらどうなりますー。堂々と明るくこちらから（こんにちは）といひましょう。きっと相手の方も（とまどい）や（気がね）時には（おそれ）からも心が解放されて、仲よくなれるでしょう。お話しするうちに、あたりまえの事なんだけど、みんな同じ人間だーって理解して下さるようになるでしょう」と。

私は、子供たちに酷なことを要求したのでしょうか？ でも、そうしなければ、交流の糸口が出てこないと思ったのです。子供たちは素直で無邪気でした。一時の怒りもどこえやら、見学のおばさんたちと仲よしになっていくことが多かったことを覚えています。

交流の場が増したとはいえ、物理的にも、心理的にも異なった環境に住んでいては、いや近くにいても交わりのはじめは、今も昔もそう変わらないではと思われまます。

障害者が理解を求めるゆえに、つっぱらねばならない社会。健常者が障害者を助けて、それがニュースとなるような社会はまだまだアブノーマルですね。障害者も健常者も同じ与えられた尊い人間。助けあい手を取りあって生きることは、あたりまえのこと。何の「てらい」もなく、また「遠慮」もなく共に交わっていく社会こそノーマルな社会なのです。 「わたぼうし新聞」 そのために更に活躍をすることを祈ります。私も25年の肢体不自由児教育の体験に学びつつ、みなさんと共に謙虚に生きたいと願っています。

少しだけ……チック 地域住民・障害者

つかれはてた自分を
やさしくつつんでくれる
メロデイは少しだけ
マイナーチック
アルバムの笑顔は数年前の海辺
何度も、何度も、
くりかえす時間はメルヘンチック
雨上がりのフロントガラスのすきまから七色
くれるランプウェイは少しだけ、ロマンチック

当新聞アンケート報告

回答数：13名 男6名 女7名
年 令：20～60才まで色々

1. 発行回数

- ・年6回 次ぎに年4回が多い。

2. 1, 2号の感想について

- ・すべてよかった。
- ・内容があたらずさわらずである。
- ・金沢の仲間が増えて欲しい。
- ・新聞の目的をはっきりして欲しい。
- ・募集内容が不足では？

3. 今後の内容への期待について。

- ・人物を取り上げ生き方を紹介。
- ・障害者、健常者の交流のきっかけを作れる情報提供。
- ・生を期待する。
- ・鋭く「障害者問題」に切り込んだ記事。
- ・障害者自身の声を聞きたい。
- ・施設レポート。
- ・旅行記等
- ・本の紹介

4. テーマの設定について

- ・地域においての健常者の障害者へのとらえ方について。ギャップを多角的に。
- ・障害者にとって家族とは？
- ・健常者（特にボランティアと称している人たち）の障害者観
- ・障害者自身の現在の立場対する思い。
- ・障害者が健常者に望むこと
- ・自分の生き方。
- ・ボランティアの真意
- ・国際青年年をどう生きるか。

5. その他

- ・俳句・詩のコーナー
 - ・言いたいコーナー
- ・障害者もボランティアの一人、あまりボランティアという言葉好きでない。

.....

それぞれの貴重なご意見ありがとうございました。

施設利用者 文芸

- ・かたつむり あじさいの葉に 雨やどり
- ・しっとり 田畑にしみる 梅雨の雨
- ・用水路 音さわがし 春の空
- ・いい天気 いってみたい 電動で

ーTO YOUー 地域住民・障害者

お元気ですかと差し出した手紙 もう貴方のもとに届いたかしら
心配しないで私のことなら ただ貴方のことが気がかりで・・・
何かメッセージをつづりたかったけど 今貴方が自分とたたかっているの
ごめんなさい障害（びょうき）のことをいって でも私は信じます貴方のことを

to you…負けないで自分のために 不自由をのりこえて生きよね

to you…頑張って明日のために そして…私のために…

逢いに行きますと書いたPost card もう貴方のもとに届いたかしら
ずいぶん逢わない貴方の姿を ひとみに浮かべ心待つ日々です。

to you…やさしい貴方でいてね いつも変わらぬ私だから…
きっと… 貴方のもとへ

ーつつじの花にー 地域住民・障害者

つつじの花… 毎年見ているのに
今年はすごくきれいだと思える
あの時 つつじの花が咲いていたかわからないけど
つつじの花を見ると私のわがままで
きずをつけた人を思い出す
あの時 自分の事しか考えられなかった
けど 今は
きずをつけられた人の気持ちを
考えられるようになった
「ごめんなさい」と 「もう笑い話にしてね」と
つつじの花に知っている私です。

「わたぼうし新聞」への声

★きっと、もっと沢山の方とたちになりたいと思っていながら、そう口に出して言えない人がいられると思います。(いろいろな活動以外に) そういった方をもっと引き込ませられるような…難しいですね…?自分の思いを伝えられない(伝えたいけども) そんな方にも視点を向けてはと思うのです。

★ 「人物」をとりあげて、生きることがどんなにすばらしいか、その人の生き方を紹介することは、他の方の励ましにもなり、よいのではないのでしょうか。

★投稿中心よりも、健常者が県内の色々な施設に訪問して、そこでの問題点や長所をその人なりのレポートがあればよいと思います。

今後は、もっと金沢の仲間が増えるように輪を広げていきたいと思います。

事務局より 新聞の感想、ご意見などをこの欄に載せたいと思います。お便りをお待ちしています。

事務局だより

能力主義が先行したひずみからか、いじめ、集団暴力が社会問題化されて、画一化の脱却を目指して個性主義が叫ばれています。「違いがわかる男の味」「ぜんざいには塩がいる」「異質分子歓迎論」言葉だとよくわかりますが、実際はまだまだ実現されていないのでは?

一・二号の感想は百人百様、同じものを読んでも感じ方、とらえ方の違いにうれしく? なった次第。障害者問題は特定の人の問題でなく、全ての国民的課題としてかかわってこそ健全な社会。障害者自身が障害者以外の社会の事柄にかかわってこそ健全な社会。この新聞は、それぞれの立場、思想、地域差、等々をこえて個々の違いを有機的に結びつける手段として生まれました。

グループ、人物紹介、情報提供、詩、俳句、感想、問題提起、等々。これを読んでいるあなたが主役です。あなたの本音を聞かせてください。障害者問題にはこだわりません。なお、この新聞の購読費は年間1,000円で4～5回発行予定です。ご協力お願いします。